

入選

親切とは

青森県 三条中学校 三年

沢目 陽

私の祖母は、誰かの役に立てるとなると、スイッチが入る。そしてたまに、張り切りすぎてしまうのだ。

「歳をとるほど、誰かの役に立てることは生きがいだ。」

と祖母は言う。

裁縫やミシンが得意な祖母は、数年前まで私が通っていた小学校で、ボランティアをしていた。縫ったぞうきんを寄附したり、ミシンの授業があるときは、学校に来てミシンの扱い方を教えてたりしていた。

そんな祖母の「やってあげたい」という思いで張り切る姿は、私にとっては少し気恥ずかしく感じることが多い。

しかし、祖母と長い付き合いがある人から話を聞くと、祖母のその心をととてもありがたく思っている人が多かった。なぜ、過剰なまでの親切心をありがたいと思うのか、不思議に思い母に尋ねてみた。

「おばあちゃんと歳が近い人たちは、昔から、周りの人たちと助け合ってきたからじゃないかな。」

と、母は言った。

たしかに付き合いが長く深くなってくると、助けてほしいときに「助けて」と言いやすくなるだろう。困っているときに手を差し伸べるのが、当たり前のようになるのかもしれない。だが、今の私は祖母のような付き合い方を自分の友達としていくのは、少し抵抗がある。

そんな私の気持ちに気づいたのか、母は言った。

「子どもを産んでお母さんになると、周りに配る目がどんどん広がるのよ。スーパーで他の小さな子どもが、その辺をよちよち歩いていれば『転ばないかな？』『危険なところはないかな？』って、自分の子育ての経験があるから、つい周りのことが気になって見ちゃうし、手を出すときもあるの。」

でも、手を貸すことが必ずしも親切だとは限らないと思うよ。周りの私たちが、あたたかく見守ってあげることも、一つの親切だと思うし。」

母の言葉に、目から鱗^{うろこ}が落ちた。手を差し伸べるだけが親切ではないのだ。

『にんげんだもの』の詩を作った相田みつをさんは、

『親切という名のおせっかい そっとしておくおもいやり』という詩も残している。

私は、祖母の親切心をおせっかいと感じている部分がある。相手が望んでいないのに、親切を押しつけるなら、負担でしかない。だが、実際に祖母の親切心は、誰かの助けになっている。母の言う「見守ることも親切の一つ」と考えれば、私にもできることがあるかもしれない。

親切は、おせっかいと言われることもある。相手のことを気にして、温かく見守る気持ちを持ち、いつか自分が大人になったとき、周りの人に優しく手を差し伸べてあげられる人になりたい。